

レトロな学び舎

(下)

あの頃をもう一度！

野口津義夫

甲州街道をちょっと入ったところにある秘密の居酒屋「シャレこうべ」 夕方、この地図に載ってない居酒屋には、どこからか仕事に疲れた人達や悩み事のある人達が密かにやって来て、駄洒落を連発したり懐かしの歌を歌ったりして古き良き時代にタイムスリップし、日頃のうっ憤を晴らして楽しんでいた。ところが、「秘密の居酒屋が秘密でなくなる時」がやって来た…。

レトロな学び舎（下）

もくじ

第十一章	大きな使命	3
第十二章	救世主の登場	28
第十三章	会員の急増	52
第十四章	常連客達の活動	81
第十五章	開校の準備	106
第十六章	遂に開校	130
第十七章	空に向かつて愛を	160
第十八章	予想外の卒業式	185
あとがき		215

第十一章 大きな使命

一月の後半は曇りの日が多かった。そして月末の二日間は雨となった。梨枝子は、ハードな勤務を終えた後の二日間の公休日に思わずほっとした。彼女は、確かに長年の看護師としての仕事に自分なりのペースを掴んではいたが、年齢による体力的な衰えは否めなかった。

外は雨——。ベランダから見える街角の風景が寂しそうに見えた。梨枝子は、例によって食パンをトースターに突っ込んだ。疲れ切っていたからだが、朝食にパン食が多いのは若い頃からの彼女の習慣だった。彼女は紅茶にスティックシュガーを二袋入れ、冷蔵庫からバナナ、チーズ、ヨーグルト、ソーセージなどを取り出した。

寛ぐ時間を確保するために、休みの日でも早起きする彼女の習慣は今でも続いている。梨枝子は、図書館から借りてきたCDを取り出し、岸洋子の「想い出のソレンツァーラ」をかけた。彼女の至福の一時であった。

（私のソレンツァーラ 夜の浜辺に：：）

『あの時は本当に、どうにもならなかったわ。きつと、わたしが悪かったのね。何も考えずに、沢本さんの胸に飛び込んでいけばよかったのに：：』

梨枝子は、自分の甘さで脆くも崩れ去った青春時代の愛を振り返って溜め息を吐いた。

何だか寂しくなってきた梨枝子は、エレベーターに乗って一階のエントランスホールまでやって来た。

「川森さん、おはようございます。どうかしたんですか」

館内と外回りの拾い掃きを終えてモップ掛けの段階に入っていた岡部は、エントランスホールで用もないのにぶらぶらしている梨枝子を見て不審に思っ尋ねた。

「いいえ……。ちよつとメールボックスを見に来たの」

岡部の顔を見て梨枝子は安堵した。たいした仕事をしてはいないが、いなければ困る、そして姿を見ただけでほつとするような包容力がある——というのが管理員の適正だとすれば、岡部はまさに合格である。

「お仕事、大変なんでしょう？」

哀愁の満ちた様子から梨枝子の心を察して、岡部が遠まわしに尋ねた。

「ええ、まあ……」

梨枝子がちよつと笑って答えた。

「元気を出してください。雨の日は誰でも憂鬱ですから——」

「ありがとう、管理人さん」

「そういう時は、温かいものを食べたり飲んだりすれば、人生はまだまだ生きるに値するって思えますよ。お昼、うどんなんかどうですか。落とし卵をすれば体も心も温まりますよ」

「まあ、管理人さんて、ユニークね！」

彼女が蘇った。

「まあね。川森さん、がんばってください。どうしようもなくなったら力になりますから」

「何言ってるの、管理人さん。何だか、わたしの心がわかるみたいね」

梨枝子は驚いて言ったが、すごく嬉しかった。

「川森さんは、岸洋子の歌なんかは聴きますか。わたしは『恋心』が好きなんです」

独身を通しての彼女の、今日のような雨の日の孤独は失恋だと察し、岡部は自分の好きな懐かしの曲を挙げてみた。

「まあ！」

梨枝子は、透視術に長けた謎の管理員の言葉に感嘆した。

「何でしたら、ちよつと歌ってみますか」

「ここで？まさか！」

梨枝子は啞然としたが、岡部は構わず口ずさんだ。

〈恋は不思議ね 消えたはずの…〉

「こんな感じですね。川森さん、とにかく元気を出してください。さっきも言いましたが、どうしようもなくなったら来てください。さしあたって、桜河百合子さんの例のエッセイの『リサイクルは蘇生かしら』を、もう一度読んでみることでですね」

そう言って、岡部はアラン・ドロンのように立ち去った。

〈リサイクルは蘇生かしら〉2007年3月23日（金）

朝起きて、一番先に何をしますかと聞かれたら、どう答えるかしら。ちなみに、わたしはゴミを出します。でも、お顔を洗って、お化粧すると答える人もいますかと思えます。たとえゴミ出し

でも、身だしなみを優先させるといふことね。

だいたい、お勤めしてる人は出勤時にゴミを出していく人が多いと思うけど、不燃ゴミや資源ゴミなど、可燃ゴミより早い時間帯に回収に来る地域では、時間帯が合わなくて、それができません。

マンションなんかはゴミ置場があるから、別に当日でなくても、毎日のゴミが出次第、日中や夜でも、どんどん置きに来るから関係ないけど、生ゴミは臭いがするから、できれば当日の方が、みんなのためにいいんじゃないかしら。

ところで、マンションやオフィスビルにおけるガラスの効果は計り知れませんが、特に、エントランスホールや中庭から差し込んでくる日の光を見ると、本当に心が和みます。差し込む光をいったん軟らかくしてくれたり、逆に煌めく反射によって、思いがけない美しさを提供してくれたりします。

ガラスがいつからあったかは知らないけど、その多種多様な用途を考えると、ガラスは今や、わたしたちの生活に切っても切れない関係となってますね。

こうしたことを考えれば、わたしたちは週に一度出す資源ゴミの意義がわかってきました。早朝、ゴミ置場に行ってみると、様々な洋酒やドレッシングなどのカラフルな瓶が並んでいます。用済みの代物なので、それらはどんなに色鮮やかな瓶であっても、その外見とは裏腹に寂しそうに見えたりします。でも、また何かに再生され、やがて蘇生することを思いやれば、夢とか期待が湧いてきて、前向きな心になってきます。

わたし、何だか、それらが輪廻転生しているみたいに感じられるときがあります。〜

次の日も雨——。午後、梨枝子がチーズケーキを持って管理室にやって来た。

「昨日はどうもありがとうございました。休みの日に雨がずっと続きと陰気になっちゃうけど、あの後、管理人さんに言われた通り、桜河さんの『リサイクルは蘇生かしら』を読み返し、お昼に落とし卵でうどんを食べたら元気が出ました。本当に助かりました。このチーズケーキ、とってもおいしいのよ。よかったらどうぞ」

梨枝子が笑顔で言った。

「これはどうも。いただきます。川森さんの、天使のようなお顔をまた見られて嬉しいです。お年は、わたしと十歳は違わないと思いますが、どうですか、人生はまだまだこれからでしょう」

岡部が占い師のように言った。

「そうね、もう一踏ん張りできるわね」

一体、梨枝子は何に踏ん張るつもりなのだろうか？自分の、看護師という天職をまっとうするということか。それとも、まだ望みのある恋を貫徹するということか。あるいは、ひよつとして岡部と同種の、何か理想的なものを求めて生きていくことなのか……。

「そうでしょう。わたしも常々何かしたいと考えてはいるんですけど、なかなか答えが出なくてね——」

「えっ、何か計画してるんですか。まさか、ここを辞めるんじゃないでしょうね」

恩人を失いたくなかった梨枝子は焦って言った。

『いずれはね。でも、その時は、きつと答えが出た時ですよ』

「辞めませんよ。もつと義務を果たしてからじゃないと——」

「義務？」

梨枝子は何のことかわからなかった。

『はい。管理員という仕事は、わたしにとつて、大きな使命を果たす前に自分に課せられた、人間としての使命だと思ってるんですよ』

「はい。居住者のみなさんが快適なマンションライフを送れるように、もつとお役に立ちたいと思っております」

梨枝子が元気を取り戻したので、岡部は余計なことと言わなかった。

二月に入つて十三日に春一番が吹き、一晚中荒れた。明くる日の土曜日、出勤した岡部は、昨夜の強風で敷地内に葉が散乱しているのに気づいた。彼は作業着に着替えて館内を巡回した。所々に、梅の花びらが雨で濡れた地面にへばりついていていた。

日曜日は天気が回復したので、彼は妻と梅を見に百草園に出かけた。そこは駅から十分ほどの距離だったが、二人は途中から続いた急な坂道に圧倒された。

「これは大変だね。貴世子、大丈夫かい？」

妻を氣遣つて、岡部が振り向いて言った。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。